

# “ハイジ”がユネスコ「世界の記憶」に登録

—スイスの二つのアーカイヴの収蔵資料—

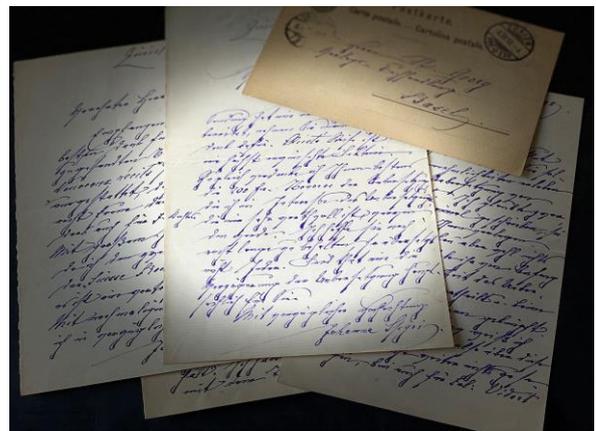
## 概要

スイスの女性作家ヨハンナ・シュペーリ<sup>\*1</sup>の小説『ハイジ』<sup>\*2</sup>は、これまで約70の言語に翻訳され、数多く映像化されてきました。中でも、日本製アニメ『アルプスの少女ハイジ』（1974）は日本国内のみならず欧米で大人気を博し、世界のポップカルチャーに影響を与えてきました。なぜハイジはこれほど大きな社会現象を呼ぶことになったのか。その点を明らかにするため、京都大学大学院文学研究科 川島隆准教授を代表として『ハイジ現象』の国際的伝播とメディア横断的展開についての研究（科研費（基盤B）課題番号：19H01251）を立ち上げ、シュペーリ／ハイジ関連の文書やイラスト原画など貴重な資料をアーカイヴ化して保存する活動に取り組んできました。このたび、上記研究グループと協働するスイスの①ヨハンナ・シュペーリ文書館<sup>\*3</sup>と②ハイジ資料館<sup>\*4</sup>が申請主体となり、シュペーリ／ハイジ関連資料がユネスコの「世界の記憶」（記憶遺産）に登録されました。文学関係では、過去に『ドン・キホーテ』や『グリム童話』が同じ指定を受けていますが、『ハイジ』もそれと並ぶ人類の文化遺産に認定されたこととなります。今後、京都大学はチューリヒ大学との戦略的パートナーシップにもとづき、“Global Heidi”をキーワードに共同研究を進めていきます。



画家プファイファーによる世界初のハイジイラスト（ハイジ資料館提供）

ヨハンナ・シュペーリの手紙類（右上）  
2022年の浜松市美術館「ハイジ展」の様相（右下）



## <用語解説>

### \* 1 ヨハンナ・シュピーリ (Johanna Spyri, 1827-1901)

スイスの女性作家。児童文学を中心に 50 作にのぼる小説を書いた。キリスト教色の濃い作風の保守的な作家と目されがちだが、女性の大学教育というテーマを少女小説のジャンルで初めて扱った人物でもある。



ヨハンナ・シュピーリの肖像写真  
(ハイジ資料館提供)

### \* 2 『ハイジ』 (Heidi, 1880/81)

第一部『ハイジの修業時代と遍歴時代』(1880)と第二部『ハイジは習ったことを役立てる』(1881)の総称。スイスのアルプスとドイツの都市フランクフルトを舞台に、自然と文明の対立やキリスト教信仰の問題を扱う。



さまざまな言語への『ハイジ』翻訳  
(ハイジ資料館提供)

### \* 3 ヨハンナ・シュピーリ文書館 (Johanna-Spyri-Archiv)

チューリヒのスイス児童文学研究所(現スイス児童メディア研究所 SIKJM)内に1968年に設立。シュピーリ作品の原書や各国語訳、シュピーリの遺品や手稿のほか、新聞記事や映像化資料などを世界中から収集。

# SIKJM

Schweizerisches Institut  
für Kinder- und Jugendmedien

### \* 4 ハイジ資料館 (Heidiseum)

チューリヒに拠点を置き、シュピーリの手紙類や『ハイジ』各国語訳、イラスト原画などを世界中から収集。京都大学の川島准教授が学術顧問を務める。上記研究グループと協力し、スイス国立博物館「日本のハイジ展」(2019)と浜松市美術館「ハイジ展」(2022)を実施。研究成果を社会に還元する活動にも取り組んでいる。

# Heidiseum®

THE HEIDI HERITAGE PROJECT

### <研究者のコメント>

「ハイジ」といえば日本では1974年のTVアニメが有名です。高畑勲、宮崎駿、小田部羊一などアニメ界の巨匠が全52話で手がけたこのアニメは、スイスで現地ロケハン（取材旅行）を敢行した良質な作品ですが、世界にはそれ以外に無数の「ハイジ」のイメージが拡散しています。ある国や地域でどんな「ハイジ」が普及しているかを見れば、その文化が何を大切に、何を切実に求めているのかが見えてくるので面白いです。